

こころの言の葉

～第12集 ひびき合う心～

平成26年度「こころの言の葉」コンクール作品集
鹿児島市教育委員会 編

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 石踊 政昭

本年度の「こころの言の葉」を皆様のお手元にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております。今年度は十二回目を迎えました。

本事業には、面と向かつては、なかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生の親と子の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は過去最高の一万六千二百四十五点。また親の部の応募も三年連続千点を超え、こちらも過去最高の数となり「こころの言の葉」への関心の高さと、親と子の心の交流が図られていることをうかがうことができました。

この作品集には、子どもから親へ、親から子どもへあてた数十編のメッセージが掲載されています。本年度は、お互いの想いを受け止めて理解し合おうとする姿が多く描かれています。また、昨年象徴的だった、辛い現実に向直した親と子の心模様に加え、それを共に乗り越えて前向きに動き出そうとする姿も綴られています。このような、親子が行き違いを見せつつも心を響かせ合う様子には、読む者の心が揺さぶられます。ご家族皆様でこの作品集に触れ、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださったすべての皆さまに心から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

平成二十六年十二月

目次

「想いを告げる」言の葉 — 子から親へ —

「もうちよっとケンカしませんか？」	4
褒め上手なママへ	5
お母さん	6
「長生きしてね」	7
私のお母さん	8
父と母	9
必殺技	10
いつか	11
無理はしないで	12
足して2で割ったら	13
あとがき	14

「想いを交える」言の葉 — 子から親へ —

焼きそば	27
言ってほしかった言葉	27
自分の道だから	28
伝える方法	28
早く気づいて	29
「お母さん、もっと頼ってください。」	29
やさしい嘘	30
お母さんとの会話	30
「いつもありがとう。」	31
あの日の言葉	31
ケンカができる日	32
心の中で	32

「想いに答える」言の葉 — 親から子へ —

儀式	16
作戦	17
予感	18
孫と同居	19
もう一度、教えましょうか。	20
反抗期	21
まっすぐに	22
手のひら	23
『レギュラー』	24
君の優しさで	25

「想いを重ねる」言の葉 — 親から子へ —

ご飯でリセット	34
「付き合おうんだぞ。」	34
水筒入れ	35
温かいおみそ汁	35
幸せな時間	36
タクシー	36
ごめんね	37
わかっているようで	37
雨上がりの坂道	38
「歩こうか」	38
何とかなるよ	39
いつも待ってるよ	39

平成二十六年年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	40
平成二十六年年度「こころの言の葉」コンクール表彰式	41
審査員講評	42
編集後記	43

「想いを告げる」言の葉

—子から親へ—



「もうちよっとケンカしませんか？」

うちの家は父子家庭だ。母は小5の時に他界した。私は、小5の時からずっと反抗期だ。父ともよくケンカをする。最近二人きりの夕食の時の話題は「学校グチ」だ。それを父は、ちゃんと聞いてくれる。それがとてもうれしい。いつも反発ばかりしているのに。だが、ケンカもする。理由はくだらないことが多い。そして大抵すぐに仲直りしてしまうが、それが案外物足りなかったりする。父にとっては、くだらないことかもしれない。でも子供の私にとっては、本音をぶつけられるとても真面目なケンカなのだ。

私は父が大好きで、基本はベツタリしていたい。

だから、

「もう少し、たっぷり、しっかりケンカをしませんか？」

だってパパの本音が聞きたいもん！



褒め上手なママへ

ママはいつも、私のいろいろなところを褒めてくれます。「行って参ります」と「ただいま帰りました」は必ず顔を合わせて言うこと。お店でお会計の後などは笑顔でお礼を言うこと。道を譲ってくれた車にはきちんと頭を下げること。落ちているゴミを見つけたら拾って持ち帰ること。困っている人がいたら自分から声をかけること。他人が自分に求めていることを察してあげること。ほかに、今までに褒めてもらったことは沢山あります。褒められるたびに、嬉しくてたまらなくなります。でも、ママは知っていますか。私がしているのは、全部あなたの真似です。全部全部、あなたの隣で見てきたことです。このままだと私はママ二号機になってしまいそうですが、それも悪くないなあと思っています。

お母さん

お母さんは、強い。なんでこんなに強いんだろう。ケンカは絶対勝てない。僕が以前、勉強しないでずっと友達と遊んでいた。

そして、家に帰るといきなり、ビンタ!!僕も怒ってお母さんに飛びかかった。そしたら、けり飛ばして、僕は泣いてしまった。

その姿を見て、お母さんが一言、

「あんたに負けたら、私は母親失格だよ!!」

僕は、最初、言ってる意味がわからなかった。

たかが、勉強で・・・僕は、机に向かった。

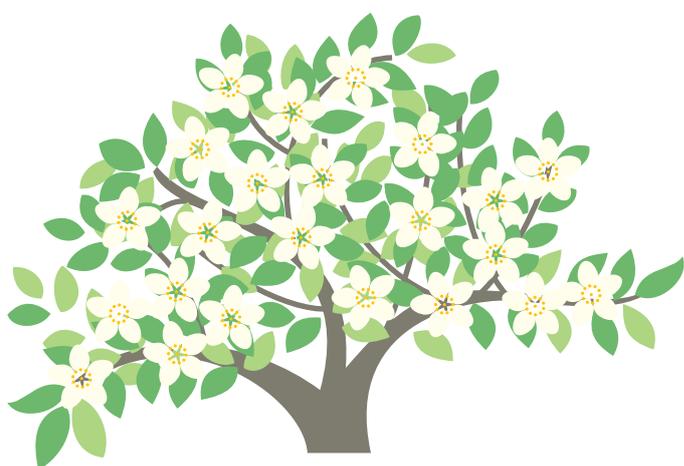
そして一時間たって、リビングに戻った。すると、

「よくがんばった。さすが私の子!!」と、褒めてくれた。

褒められたら、とても安心した。涙がこぼれた。

世界一怖くて、世界一強くて、世界一優しい、完璧なお母さん。

僕も、奥さんが出来たらお母さんみたいな人欲しいなあ。



「長生きしてね」

新しい学年になる期待と喜びを感じていた春。

私の父は病気になりました。「食道がん」というがんです。

まだ何も知らされていなかった頃の私は、日に日に落ち込んでいく父をとて不思議に思っていました。

「お父さんはね、がんにかかっちゃったの」そう、母から聞いたとき、

私は何の声もかけることができませんでした。

そして、父が入院、手術をしている間いろんなことを考えました。

楽しい思い出、謝らなければいけない思い出、反抗をした思い出。色んな思い出があります。どの出来事も一つ一つ、とてもかけがえのないもので幸せだったんだな、そう気づかされました。

今では、父は無事退院しています。大切なことに気づいた私は、昔の私と違います。

今この時を大切にしたいです。「長生きしてね、お父さん。」

私のお母さん

私にはみんなと同じお母さんがいる。でもちよつとちがうお母さんだ。私のお母さんは、おばあちゃんだからみんなのお母さんとは、ちよつとちがう。でも、私のことを第一に考え、みんなのお母さんと同じように育てて同じようにごはん作って同じように買い物とかもいっしょにする。だからみんなといっしょのお母さんだ。年はちがうけど、友達のお母さんたちともいっしょになっておしゃべりしてる。私のためにがんばってくれてる。やっぱり私のお母さんは、私のお母さん。あたたかい手のぬくもりもみんなといっしょ。べつに本当のお母さんなんてもういらぬい。だって私にはお母さんという名のおばあちゃんがいるから。



父と母

母の仕事がいそがしくなってきたから、父と母は、二人で話すことが少なくなった。話すときは大体、口げんかになってしまう。父と母のけんかがはじまると、私は妹を、別の部屋につれていく。そして、わざと明るい話をして、気づかないふりをするのだ。

父と母は、二人とも優しい。父はいろんな所に連れていってくれるし、母はねむたい目をこすって朝ご飯をかならず作ってくれる。私はそんな二人が好きだ。だから、家族全員そろわない食卓をみて、胸がぽっかり空いた気分になる。

私が今、父と母に言いたいのは一つだけ。

「お父さん、お母さん、もう一度、前みたいにもどりたい。」



必殺技

ぼくは中学生になって、おこられる時もだんだん反こう的になってきたと自分でも思っている。そして、いつもの父とのけんか、実際のところ、ぼくが悪いのだろうか、ぼくにも言いぶんがある。父さんは、「いいわけするな。」ですますが、ぼくは、事実をのべているだけである。そして父の言う「言いわけ」というものをしてしていると、それを言い終える前に、父の必殺技「もういい、どうでもいい、もう好きにすればいい。」が発動する。これを言うと、父は、完全に無視をしだす。もうぼくは、ここう言われると、どうしようもない。結果、ぼくの、「ごめんなさい。」で和解。ぼくが悪い、で終わる。

父さん、必殺技を出さないで、ぼくの言いぶんも聞いてほしい。



いつか

私はついこの間まで「不登校」でした。でも立ち直れたのは、お父さんがいてくれたお陰です。毎朝私の部屋の前に立って「おはよう、起きてるか。」と声をかけてくれたこと。不登校児向けの教室を寝る間をけずって必死に探してくれたこと。請求書に示された高い金額をにらみながらも、私を塾に通わせてくれたこと。全てがありがたくて温かい。

どんなに辛くても、お父さんは亡くなったお母さんの分まで背負い、私を支えてくれました。

直接言おうとすると、きっと私は泣いてしまいます。だから、いつかお父さんがこの文を読む日が来ると信じて……。

「迷惑かけてごめん。そして、ありがとう。」



無理はしないで

気づけば母ちゃんいつも居眠りをしているね。

昼食の後、夕食準備の前、風呂の前、夜リビングに降りてきた時……。

そんな母ちゃんを見ていつも思い浮かぶのが、「何時に寝てるんだろう……」だ。

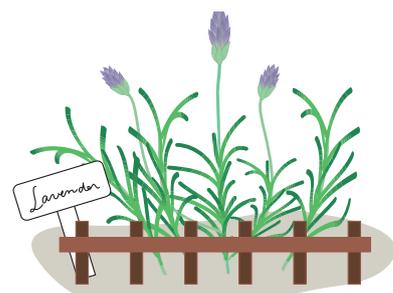
父ちゃんの話だと、日付が変わってもまだ台所にいるんだってね。

母ちゃん、無理は絶対にしないで。何かひとこと言ってくれれば手伝うから。

嫌な顔をするかもしれないけど、何も言わずにちゃんと手伝うから。

無理は絶対しないで。縁起でもないけど、母ちゃんが倒れたら僕らの家はまわらないから。

最後に一つだけ母ちゃんがしてくれた今までのこと全てに、ありがとう。



足して2で割ったら

「お父さんとお母さんを足して2で割ったら丁度いいかもね。」

そんなことを言うと、

「あんたたちも足して2で割ったら、すっごく良い人間になるよ。」

と私と弟を見ながら笑って言い返してきた。

言われて嬉しかったのを覚えている。私たちの長所も短所も、分かってくれているんだと思ったから。

お父さんと作る料理は、いつもあったかい。

お母さんとたたむ洗濯物は、いつもやわらかい。何気ない日常の一コマでも、お父さんとお母さんの時間をいつも大切に思っているよ。

これからも、よろしくね。



あとがき

父の書いた本、開くのはいつもこのページ。私が小さい頃のエピソードが書かれたエッセイ。このエッセイを読むと、生まれてからずっと優しく見守り育ててくれた両親の心を感じることが出来る。辛いときはときどき開いてみる。

ある日、とくに何も考えることもなくいつものページを開いた。そして、いつもはそこで本を閉じるのだが、ぱらぱらとページをめくり、あとがきの最後の部分が目にとまった。

「物心ついたときから自然との付き合い方を教えてくれた父と母にこの本を捧げます。」
小さいときから私を海や山に連れて行ってくれた父。それは父の両親から受け継いだこと。そのことをこの本から知ることが出来る。家族のつながりが感じられる。ずっと、ずっと、大人になっても大事にしたい。

「想いに答える」言の葉

— 親から子へ —



儀式

七月二十五日、朝。今日は、娘の誕生日。私はマジックを持って、ある儀式をするために娘の部屋へとやってきた。

大きくなった娘の足の裏に「14」と書く。

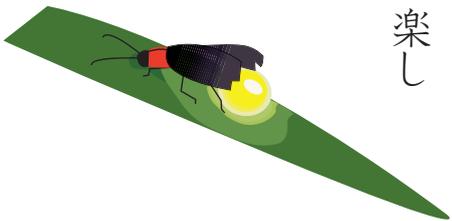
「今年も無事にこの日を迎えられたね。ありがたいなあ。」

モゾモゾ寝返りを打つ娘の頭をそっとなでる。

母としての実感を味わう私だけの大事な大事なセレモニー。生まれてすぐにここにこ
うして名前を書かれたっけ。ふわふわやわらかい足は私の手にすっぽり入ったっけ。

でもきつとこの足で、毎日たくさんのことに立ち向かっているのだろう。喜び、楽し
くジャンプもしてきたのだろう。力を入れ、踏んばったこともあるのだろう。

わかってるよ、うん、大丈夫…!!



作戦

お母さんさ、毎日毎日飽きもせず、貴女にかわいいだの愛しているだの言うでしょう？
作戦なのよ。

貴女のその手を握り、手伝ったり、邪魔したりするでしょう？
それも作戦のうち。

いつの日か貴女はこの手を振りほどいて、自分の力でとあがくでしょう。

その手で何かつかんだと喜び、錯覚だったと嘆き、今度こそ、いや、やはり、をくり返して、やがて気づくでしょう。

見えざる多くの手があったのだと。

お母さん以外にもたくさんのお母さんの愛があって、支えられているのだと安心して歩いていくでしょう。

後は、感謝と幸せを感じることでできる背中をお母さんは見届けるだけ。
少しさびしいでしょうって？

全てはその日のための作戦、さびしくなんか、ないよ。

予感

毎日のように手をつないで通っていた保育園までの道。

ある日、つないだ手をふりほどいて、先に行く友だちの元に走っていくのを見て

「もう手をつないで行くことはないかも」と予感したのを覚えています。

予感的中し、もう手をつないで行くことはありませんでした。

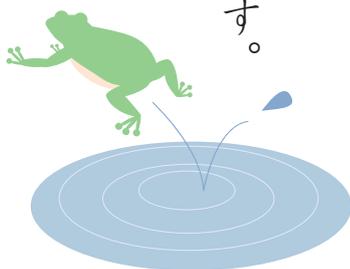
少し寂しいながらも、成長が嬉しいものでした。

成長は、いずれ親元を離れ独り立ちするまでの、小さなステップの積み重ね。

そして寂しさと嬉しさの積み重ね。

ああ、この心のうねり、何と素晴らしいことか。これからも楽しませてもらいます。

時には尻を蹴り飛ばす父より



孫と同居

あなた達と一緒に住むことにより

おじいちゃんと私は、元気をもらっています。

「子育て」を時を越えて、何十年振りに出来るとは思っていませんでしたが、ありがたいですね。

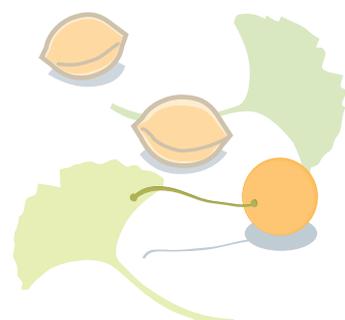
「あなた」と「妹」、二人の成長を、あなたのお父さんと共に、我々は、見守っていますよ。

こういう機会を与えられたことに感謝!!

あなたの持っている能力を大いに発揮してもらえたら、幸せです。

「部活」に「勉学」に、まず、身体を第一に、健康であることが何よりです。

祖母より



もう一度、教えましょうか。

「は？」

「なに」

「っせいな！」

もう一度、言葉を教えましょうか。



反抗期

「ウザイ」「キモイ」「ダルイ」

そんな返事でもいいから会話がしたくて

しつこくいろいろ注文を付けてみる。

中学生なんだから反抗するのは当たり前。

成長ホルモンのせいなんだから…。

もう少しゆっくり成長してくれてもいいのに…。

でもたまに見せる祖父母への優しさにホッとする。

もう一度あなたと手をつないでみたいなあ。

「キモイ」と言われてもいいから…。



まっすぐに

「ただいま」ぶっきらぼうに、ぼそっと呟くと君はすぐに自分の部屋に向かう。

「おかえり、今日はどうだった？」

問いかける母の声に反応する間もなく、君はイヤホンを耳に差し込む。

幼稚園の頃、送迎バスから降りるや否や、まっすぐに掛けてきた君

汗だくで、「ただいま」の大声と同時に「あのね、今日ね・・・」と聞きもしない一日を

機関銃の様に話し出した小学生の君。

反抗期なのか、思春期なのか、自分の中学時代を思い起こし、

「中学生の男の子が、親に話しかけるのもおかしいか」

必死にそう思うことで、寂しさを紛らわす。

恥ずかしいのか、機嫌が悪いのか、親に話しかけられないのは、仕方がない。

でも、これだけは言っとくよ。

「ただいまと言うときはまっすぐ親を見なさい」

幼稚園の時と何ら変わらない、まっすぐな瞳を見れば、君のことは判る。それが親と言

うものだ。

ただ一つ、親をまっすぐに見なさい、私も君をまっすぐに見つめる。それだけでいい。

手のひら

お母さんはいつしなくなるかドキドキしながら

通りすぎる息子に手のひらを向ける。

すると、時にはハイテンションで、時にはイヤイヤながらも、いつもタッチをしてくれる息子に感謝している。

お母さんが疲れている時、それがどんなに特效薬に

なっている事か・・・。

母と息子のコミュニケーションがいつまでも続くように

勇気を出して手のひらを向け続けたい。



『レギュラー』

小4から始めたサッカー。

中学生になって格段に動きが変わって、

決して上手いとは言えないけれど、運動が苦手なお母さんは本当に感動していたんだよ。でも、3年間一度も、レギュラーとして公式戦に出ることはなかったね。

夏の炎天下でも冬の寒い中でも一日中「見てるだけ」の日も少なくなかったはずなのに、練習は休まず頑張ってた。

3年になったある当番の日、

「僕は出ないのにお母さんの休みを潰してごめん」と君に言われた時、自分が情けなくて泣きたくなかった。

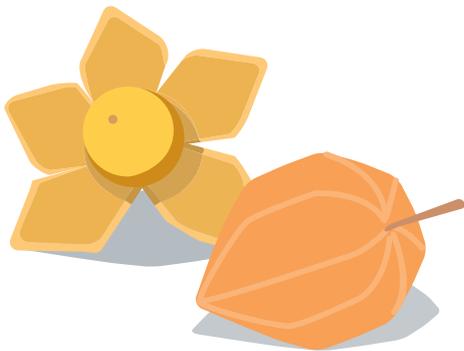
きっと私はそういう顔をしてしまってたんだろう。

レギュラーになりたくて試合に出たくて悔しいのは君自身なのに。

当番の日しか試合見に行かなくてごめんね。

試合に出なくても、応援してる君の応援にもっと行けば良かった。

いつでも君はお母さんの人生の中の10番なんだから。



君の優しさで

世界で一番の我が子。子供の為なら

役員でも行事でも、なんでも協力しようと表舞台に。

でもね本音は違うんだ。両手に障害があり目立つから、

私のせいで「いじめ」に逢ったらどうしよう、お父さん学校に来ないでと、

いつ言われるかと、すごく不安だった。

でも誰一人として何も言ってくれない。

本当は辛い思いをしたと思うけど・・・ごめんね。

こんなお父さんだけど感謝してます。

君の優しさで、お父さんは今以上にエネルギーが湧いてますよ。



「想いを交える」言の葉

—子から親へ—



焼きそば

僕の母が用事でいないときは、父が、よく、夜ご飯に焼きそばを作る。その焼きそばは、決まって三人前ぐらいあり、目玉焼きが皿を覆っている。

そして、一口食べると、決まって父は、「おいしいか。」

と聞く。僕は決まって、あいまいな返事をして受け流す。本当は、ソースが麺とからまってなくて、うすい。何より、量が多すぎる。それでも、全部たいらげてしまう自分分は、父が作った焼きそばが好きなんだと思う。また、父が好きなんだと思う。

僕は、

「今夜も焼きそばか。」

と思いつつ、その焼きそばをほおぼるのであった。

言ってほしかった言葉

あの日、母に言った。

「理科で91点とったよ。」

母はこっちを向かない。向かないまま、

「それだけ。数学で70点以上とったらお小遣いあげるから。」

そんなのいらぬ。今まで頭の良かった姉と比べられてきた自分にとって、理科だけでも良かったのは嬉しかった。頭が悪いのは、自分も母も父も同じだった。

そんな母に言われた言葉はショックだった。

「頑張ればお前もできるんだ。」

そう言った父でさえも、「理科だけか。」

もう何もかも、頑張るつもりはない。認めてもらいたくて、少しずつ頑張っていくつもりだった。

「頑張ったな。だがお前ならもっとできるぞ。」
一番信頼していた父に、言ってほしかった言葉だ。

自分の道だから

お母さん、あなたはいつも私の進む道を決めてくれる。それはとてもうれしい。

「〇〇に行った方がいいんじゃない？」

「私は〇〇の方がいいと思うけど。」

母が決めてくれる道はムカつくぐらい正しい。

でも、でもね私だって別の道行ってみたいんだ。まちがっててもいいから、自分で決めた道を通ってみたいんだ。そんな私を母はよくワガママって言うよね。でも私からしたら母だってワガママだよ。自分の言うとおりにしないとキレて、勝手にスネる。子供かっ!!! て叫びたくなるときもある。心配して怒ってるということも少しは分かっている。私が行きたい道に行けば今までやってきたことが無たになるって知ってる。

でも、自分の道だから。自分で決めたいの。ワガママでもいいから私は自分で決めたいと思うの。

伝える方法

いつからだろう。素直に「ごめんなさい」が言えなくなったのは。「ありがとう」そのたった五文字を、感謝の言葉を口にする回数に極端に減ったのは。伝えたい感謝の気持ちはいつだって胸（ここ）にあるのに。私たちは成長するにつれ、親のありがたみや苦労が理解できるようになってくるはずなのに、なぜか成長していくにつれてどんどん不器用になっていく気がする。シシキキなんだから仕方ないじゃん、感謝の言葉が言えなくなつて。中学生ってそんなもんでしょ？そんな「中学生」という立場に甘えている状況。

でも、最近気づいたことがある。口で感謝を伝えられないなら行動でしめせばいいのだ。感謝の気持ちを伝える方法はひとつじゃない。今度塾がない日に言ってみよう。夕飯をつくっている母に。

「なにか手伝えること、ないかな？」

早く気づいて

お父さん、いつもありがとうございます。いつも面白いことを言って笑わせてくれてありがとうございます。いつも私の悩み事や相談に乗ってくれてありがとうございます。めんどくさそうな態度しかとらない私だけど、いつもお父さんに感謝してるよ。

お父さん、大好きだけど嫌いな所が一つだけあるよ。それは…、タバコを吸うのをやめないこと。

学校の授業で喫煙している人の肺の写真を見て、その時に「喫煙をすると後々病気になり、死ぬことがある」って聞いたよ。怖くなって、泣きそうになったよ。夜に眠れなくなることもあったよ。

家族みんなお父さんのことが好きだから、これからも家族みんなで仲良く暮らしたいから、タバコを吸うのはやめて。私にとってお父さんは一人しかいないんだよ!! ずっと一緒にいたいから、早く気づいて。私の願いに、家族の願いに!!

「お母さん、もっと頼ってください。」

離婚が決まって数日、お母さんの中ではずっと前から考えていたんだよね。

今までは、家族がそろくと息苦しさを感じていたけど、最近少し、空気が軽くなってきたがしています。それはきつと、お母さんたちも同じだと思う。

お互い荷がおりたのかもしれないけど、お母さんには私やお兄ちゃんがいて、これからも迷惑をかけることになると思う。

そしたらお母さんの気持ちは、プラマイゼロにならないかな。無理してほしくないな。でも、無理しないなんて、できないんだろうな。

私たちを頼ってね。もう、みんなで息苦しい生活はしたくない。してほしくない。週末のごはんくらい、私が作るよ。いつもいつも、本当にありがとうございます。

やさしい嘘

「お母さん、これ食べないの？」

「食べないよ。まゆこが食べなさい。お母さん、さっき食べたから。」

お母さんは嘘つきだ。ちっとも食べていないのに「食べた」なんて言うのだから。そして、わたしもお返しにこう言うのだ。

「お母さん、これ食べて。わたし、あんまり好きじゃないんだ。」

と一番おいしいところをお母さんあげる。お母さん、いつもわたしとお姉ちゃんのために、わざと「いらない」っていつてくれてありがとう。だから、これからはわたしも、人にゆずれる人になりたいな。



お母さんとの会話

お母さんは、僕のことを色々聞いてくる。学校から帰ったら質問攻めの時もある。その時は「疲れてるのにうるさいな」と思うこともある。上の空で質問を聞いていると、すかさずチェックがはいる。時々「何をそんな聞きたいのかな」と思うこともあるけど、お母さんも話をしながら笑ったり、おこったり、楽しそうにしている。

お母さんは僕だけでなく弟や家族みんなのことを見ている。しなくてはいけないことばかりで時々疲れている。そんな時は「質問も少なくて質問攻めがなくて楽だな」と思う時もある。しかし、なんだか静かでさみしい気持ちになる。いつも話をしてくれて、色々と聞いてくれるお母さんが、楽しくていいなと思う。

「いつもありがとう。」

お父さん、お母さんいつもありがとう。こんな感謝の言葉、今の私は言えない。恥ずかしい。そう思ったり、言わなくても伝わると思っていたから。

私のお家は普通とは言えない。親が離婚して父子家庭で育ってきた。今ではよくある話の一つかも知れない。家事を手伝ったりして。でも、お姉ちゃんやお父さんにほとんどしてもらっていた。

ある日、お父さんもお姉ちゃんも夜いない日があった。自分でご飯を作り、片付けて、洗たくもしたり、全て自分一人でやってみた。家事の大変さ、一人ぼっちのさみしさがよくわかった。

お父さんとお姉ちゃんが帰ってきた。私は、おかえりとは言わず、

「いつもありがとう。」とお父さんとお姉ちゃんに感謝の気持ちを伝えた。

あの日の言葉

ねえお母さん。きつかった？痛かった？ごめんね。あの日、家出なんかしなきゃ、今妹が、娘がもう一人いたのに。ねえお父さん。ごめんね。いつも仲裁に入って止めてくれる。でもね、無理だった。赤ちゃんばっか。大事なものは十分分かった。けど、きつかった。前みたいには話せないのが。学校行事に来てくれないのが。ごめんね。私のせい。私が出しなきゃ、少し我慢してれば。ずっと思ってた。私が、妹を死なせた。でも、「あなたのせいじゃないのよ。」って、泣き笑いで言ってくれたあの日。本当はね、家出した日に死のうとしたの。逃げたかった。でもね、怖くなった。足元が疎んで、涙が出て、身体が震えて。だから、死ねなかった。家族と離れるのが、友達と離れるのが怖かった。だからねあの日の言葉、忘れない。

「赤ちゃんより、あなたの方が大切だったのよ。」

ケンカができる日

私は、お母さんが病気で倒れたあの日から、親に本当の自分の意見を言うのが怖くなりました。あのとき私は、不用意にお母さんに反発していました。その年の冬、お母さんは心臓に異常が出て病院を歩き来する日々が続きました。私は毎日、お母さんに言った言葉の数々を悔やみました。本当はお母さんにかまってほしかったんです。今思えば本当に幼稚な考えだったと思います。次の年、お母さんは元気になって戻ってきました。元気になったのは嬉しかったのですが、私はまだ、お母さんに謝ることもできていないので、面と向かって自分の意見を言うことができません。

お母さんとケンカができる日が、いつかは来ますように……。

心の中で

私は、母の頭を見ると胸が苦しくなる。これで三回目だ。母は、ストレスのせいで髪がぬけてしまっている。髪がぬけるほどというのは、よっぽどストレスを抱えているということだ。そんな母に私は、「病院行った方がいいよ。」と言うことしかできない。自分の無力さに腹が立つ。こんな風になってしまうのは、私のせいでもきっとある。私が不自由なく暮らせているのは、母の努力のおかげだ。母は、何もかもがまんして、私を育ててくれている。そこまでしてくれる母親は、どこにもいないだろう。そんな母に、今は何もしてあげられない。けど、私は、心の中でいつも思っている。

「お母さん、私が大人になったら、いろいろなお店に行って、買い物して、おいしいご飯食べて、旅行に行って。私が絶対お母さんを幸せにさせてみせる。それまで、元気でいてください。」

「想いを重ねる」言の葉

— 親から子へ —



ご飯でリセット

「うっせえー!」マジ意味分かんねえ!」
クソババア」

小学生の頃には聞かれなかった言葉の数々。
屁理屈のオンパレードにあきれるやら腹が
立つやら。

母親とだけ繰り広げられるバトル。

一分前まで普通にしゃべっていたのに一瞬
で豹変する原因は…

私の(母)の一言なのでしょいか。
同性ってやっかいだね。

この嵐、あと2、3年続くのかな?

私も中学生の頃の自分を思い出して、親に
どう接して欲しかったか考えています。

バトルはしよっ中するけれど、「今日の夕
飯は何?」とふてくされながら聞いてくる
あなた。

ご飯でバトルもリセット。

これで乗り切っていきましょう。

「付き合うんだぞ。」

この前「スマホ買って」って言ったよね。
「どうしてー」って聞いたたら、

「将来一緒に飲もうって約束した友達があ
きたから」

って嬉しそうに言ったね。

友達同士でそんな話をしているんだね。

ビックリしたけど将来父さんにも付き合う
んだぞ。

二人で飲むなら母ちゃんには怒られない
だろう。将来よろしく頼むよ。

最後になったけど、まだスマホは買わな
い。



水筒入れ

古くて、少し汚れてしまった水筒入れ。幼い頃から使い続けている。

「水筒入れ、新しいの買おうか？」と聞くと、「いいよ、まだ使えるから。」と答える貴女。

昨年も一昨年と同じ会話をした気がして、「でも、もう古いし、こことか、ここも汚れてるよ？」と言ったら、ビックリする答えが返ってきた。

「あのね、この水筒入れは、お母さんが初めて買ってくれた水筒入れだから…だからまだ使えるから、いいの。」すごくビックリしたけど、普段から物を大切に扱う貴女から教わったことです。

物を大切にすることで、人の思いを大切にすることだよね。

すごく「ジーン」ときました。優しい気持ちを持つ子で良かった。

温かいおみそ汁

疲れて「みそ汁作ってよ。」とみそ汁作りをお願いしていたけれど、今では「疲れてるでしょ。作るよ。」と代わりに作ってくれるおみそ汁。

最初は、ダシが入っていなかったり、具が半生だったり。笑いながら食べたね。でも、今では、お母さんが作るおみそ汁よりおいしいよ。疲れていなくても、どんな時でも、あなたが作ってくれる物は、温かくておいしくて、心もポカポカです。

知らぬうちに、お母さんの身長を追い越し、成長しましたが、人を気遣える心優しい子に、心も成長していることを嬉しく思います。

ありがとうございます。次は、お母さんの大好きな茶わんむしと一緒に作ろうね。

幸せな時間

毎日、部活と自主練、宿題にと追われるように過ごすあなたを見て、

「今日ぐらいもういいんじゃない。」と言
いそうになるけれど……。

疲れてソファーに寝てしまったあなたの頭
をなでながら、

「えらいね。」と二人で眺める時間は、本
当にありがたく幸せです。

あなたの努力が実ることを、私たちは心か
ら願っています。



タクシー

「お客さん、初乗り五百円です」
最近、私の運転する車に乗ると、あなたは迷
わず後部座席へ座る。

私は、タクシーの運転手か！と心の中でつぶ
やく。

エアコンがよく効くし、音楽も自在な助手席
ばかりずっと座っていたのに……

そういえば、何年前か、先輩のお母さんが話
していたのを思い出した。

「反抗期の頃って助手席に座らないだよねー。
それが反抗期の一つの目安?みたいな。」

あー、そういうことか、なんとなく自分を納
得させる。

じゃあ、いつかまた助手席に戻ってくる日が
くるのかな。

その日まで、タクシー ただ乗りさせてあげ
ようか。

そして、数年後 あなたが運転する車の助手
席に座れる日を楽しみに待ってしよう。

ごめんね

ごめんね。

おいしいものを作りすぎて

また丸くなった君

ますます母に似てくる君



わかっているようで

見ているようで 見ていなかったり、

聞いているようで 聞いていなかったり、

伝えているようで 伝わっていなかったり、

わかっているようで わかっていないこと

も多いけど、

応援しているよ。



雨上がりの坂道

夏休みのある日、私が仕事を終え、買い物をして外に出てみると、見慣れた姿がありました。

今日は、部活も休みで宿題をがんばっているはずの息子が、傘を二本持って立っていました。ものすごい大雨が降ったので、傘を持って来てくれたのです。

その時はもう雨はやんでいたのですが、その気持ちがとてもうれしかったです。

帰りの坂道を二人、たわいもない話をしながら、楽しい時間を過ごしました。

「歩こうか」

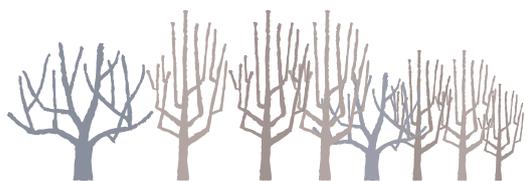
休みの日に、「歩こうか」と声をかけると、「行こうか」といつも返してくれる。

一緒に歩いていると、風が気持ちよく感じられる。

そして、清々しい汗をかくことができる。

休日の中の、つかの間の楽しいひととき。

ありがとうね。



何とかなるよ

いつも泣きごとばかり言っているのは、
もっと強くなりたいという心の裏返し。
あなたは自分の心と向き合えるのだから、
それだけで、もう立派なんだよ。
今日からは、一日一個、よかったことを
一緒にみつけていこう。大丈夫だよ、
何とかなるよ。お母さんもそうだった
から。



いつも待ってるよ

「僕は、こんな人間じゃない。」
その一言が、心に深く刻まれた。親として、
この子の何を見てきたのだろう。今まで、ど
れだけ傷ついてきたのだろう。ただただ、悔
しかった。
でも、まだ十四才。人間、いくつになっ
ても変わるんだよ。今まで「仮面をかぶって
いた」と思うなら、脱ぎすてる努力をしよ
う。いろんな壁にぶつかった時、楽しいだけ
じゃ乗り越えられない。回り道したって、後
ずさりしたっていいじゃない。後ろを振り向
いた時、いつでも見守っているから。…でも
ね。いくら親子でも、口にしないと伝わらな
い事が多いんだよ。あなたも一日一日成長途
中。私も親として成長途中。あなたはあなた。
私は私。
「僕は、こんな人間なんだ！」
いつでも伝えにおいで。いつも待ってるよ。

平成 26 年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧

応募総数 16,245 点 (中学生 14,905 点 親 1,340 点)

賞	中学生の部	親の部
大 賞	内司 悠斗	玉泉 誠
準大賞	芝 柚希	中釜 生子
準大賞	桑波田苑伽	川東 理佳
優秀賞	近藤友里菜	郡山 啓作
優秀賞	宮田恵美理	谷口 典子
優秀賞	竹内 初音	竹之内基子
優秀賞	水主 明里	森 勇二
優秀賞	尾辻 勇太	奥 律子
優秀賞	丸田涼太郎	宮内 美穂
優秀賞	出羽 優風	脇田 星子
優秀賞	肱岡 倅子	
入 選	内村 良太	藤田 優子
入 選	川中 寧々	永野 和代
入 選	仲宗根志織	西村 美保
入 選	稲富 光紗	西田 映子
入 選	坂口 円香	中脇 馨
入 選	高良 美海	河東 教子
入 選	中島 黎士	田中 宏治
入 選	井上 玲	山元志奈子
入 選	服部あゆみ	能瀬伸太郎
入 選	岩元 愛花	郡山 由紀
入 選	林 春樹	
団体特別賞 清水中学校		

※ 入賞者で、了承が得られた方のみ、氏名を掲載しています。

平成 26 年度「こころの言の葉」コンクール 表彰式

～平成 26 年 10 月 18 日（土） 市民文化ホール 第 2 ホール～

石踊教育長より
表彰状の授与



受賞者インタビュー

鹿児島玉龍高校放送部
生徒による作品朗読



審査委員長講評

審査員講評

審査委員長

上谷 順三郎 先生

「こころの言の葉」コンクールの作品に目を通しての間、まるで親と子の会話の場に居合わせているような感じがしました。親子がそれぞれに対して直接書いたものではないのに、そのような感覚にとらわれたのは、やはり、家族に向けた言葉には言葉の情緒的な力が働くからでしょう。

このコンクールの良さは、言の葉に乗せて心を届けるという、実は普段なかなかできないことをする機会を提供していることにあり、と思います。そして作品集としてまとめることで、その時々鹿兒島の親子の姿が記録として残され、語り継がれているということです。子ども皆さんにはぜひ、今度は親になった時にその時の思いを作品にして送っていただきたいと思っています。

この作品集には、家族の間で、口にしたく言えなかったことが書かれています。また、書いてみることで自分の考えや気持ちを整理されていく様子が書かれています。審査をした私たちは、直筆も見ることができました。本人の書いた文字からは、活字にはないその人らしさが伝わってきたということをつけ加えておきたいと思っています。

もつと男子の作品を読みたいと思います。同じように、もつと男親の方の声も聞かせてください。同じような内容だと思っても、人が違えば言葉も違って、伝わることも異なってくるものです。来年の出品を楽しみにしています。

鹿兒島大学教授

大浦 慶子 先生

今年も審査をさせていただきました。応募数は、更に増え、一万六千点を超えています。パソコンや携帯電話等の通信機器が発達している現代にあつて、紙面と向き合い、詩や文にしたためたメッセージが、こもこも心に響くのかと、思わず笑顔がこぼれたり涙が頬を伝ったりする多くの作品と出会いました。

子どもたちの前に立ちあはだかる父親の背中や、言葉にできずそつと見守る姿。日常の一言一語に触れ合う母と子の言葉のバトル、その中で心ひそかに相手を思いやる姿。孫を我が子として慈しみ育む祖父の姿とそれを受け止める孫の姿。事情があつて、父親や母親と一緒に暮らせない中で互いを思いやる姿。親の心を知っているかのように、その辛さを代弁する子どもからのメッセージ。心の寂しさを、こんなにも心を開いて伝えたいのかと心を締め付けられる作品等々。

いつの時代にあつても、互いの存在を確かめ合うことの大切さを再認識することでした。社会の変化がめざましい時代の中にあつて、家族の有様も多様になってきています。そんな時代に生きている子どもたちが、次の世代を担っていきます。子どもたちを親を支える社会であつてほしいと願わずにはいられません。

思春期の多感な時期に、互いの真の思いを綴った作品集「こころの言の葉」を多くの保護者、大人、子どもたちに読んでほしいと切に思うことでした。

市教育委員会スクールカウンセラー

古河 美香 先生

親が子を、子が親を傷つける事件も少なくない昨今ですが、作品を通して多くの親子が深い愛情に包まれ、温かな家庭を築いている姿が目につきました。本音を綴った作品からは、親も子もがきながらも「心の拠り所となる家庭にしたい」という思いがにじみ出ていました。日々の成長を喜び「いつまでも見守りたい」と願う親。気持ちと裏腹な言葉を発しながら「ちゃんと私を見て欲しい」と訴える思春期の子ども。互いに感謝しているのに気恥ずかしさから素直に「ありがとう」と言えず、そんな心の行き違いにもどかしさを感じながら、親子とはそういうものかもしれない、とも思いました。

子どもの鋭い観察力には驚かされました。親のちよつとした一言に何かを感じ取り、眠そうな目をこすつたり深夜まで家事をしたりする姿を見て「力になりたい」と思う子ども。一方、親の何気ない言動が心の傷となつていくケースも見受けられました。思い切つて反抗したものちゃんと聞いてもらえないという話もありました。SOSにも近い心の叫びを、一番身近にいるはずの親が受け止めず誰が気付くのだろう。子どもの心の声にしっかりと耳を傾けてほしいと願っています。

葛藤を重ねながら生きる様々な親子の日常が伺える「こころの言の葉」。親と子がまっすぐに向き合うきっかけになればと思います。

NHK鹿兒島放送局記者

坂口 洋文 先生

昨今の児童虐待やお年寄り虐待などのニュースを耳にするにつけ、何とも言えない悲しい気持ちになる。絶対的な親子や近親者への「思いやり」へのほころびが、身近に迫ってきているようにも感じる。そのような思いの中で審査をしていると、このコンクールの意義深さを改めて認識することであった。

中学生になると、親べつたりから自立に向けて歩き出す。他人のように親を見る。衝突が起こる。親の愛情を感じつつも素直になれない、イライラする、自分をコントロールできない……。反抗し心が通じ合わない我が子を前に、親も動揺する。そのような家庭にもありそうな問題が作品に盛られている。

ただ、中学生時代は、人としての生き方や生活をしていくための基礎となる学力を付けるなど、人生の土台作りにおいて極めて重要な時期である。それゆえに、親子の中に温かいものが流れ、精神的に安定した中で人生の目標を見つけ、お互いに学び合い支え合っていくことが大切である。

この作品集には、面と向かつては言えない親子のさまざまな「こころの言の葉」が掲載されている。親子の本音を理解し合いながら、明るい親子関係を築いてほしい。思春期の子と親に生じる様々な危機に正面から向き合い、お互いの溝が埋まり、人生の確固たる土台作りができることを切に願うものである。

元中学校校長

神野 佳也 先生

現代は、思いもしなかったような自然災害や大きな事故が起こるなど、先の読めない時代です。子どもたちを取り巻く環境も複雑化し、多くの解決すべき新しい課題が生まれてきています。そんな中で、私は、特に情報端末機の急速な普及によって直接人と人が関わる経験が不足して、次第に「人を思いやる心」が失われつつあることを危惧しています。「思いやり」とは「相手の立場に立って考え、相手の気持ちを大事にして行動する」ということで、「人を思いやる心」は、私たちが生きて生活していく上でなくてはならないものです。そして、この基本となるのは親子の心の交流、親子の絆であると思っています。しかし、親子で思いやりの気持ちを表すのは、身近なだけに難しいことです。お互いに感謝の気持ちをもちながらも、最後は、いつも口喧嘩で終わってしまう、そんな経験をした人も多いのではないのでしょうか。

今回、私は総数16、245点の「こころの言の葉」を審査させていただく機会を得ました。どの作品も親子がいつも心の奥底で感じながらも余り口に出すことがない感謝や思いやりの気持ちが、素直に表現されていました。私は何度も読み返し、その度に家庭内での微笑ましい様子を想像したり、胸が詰まり目頭が熱くなったりしました。そして、この審査をおして改めて親子のコミュニケーションの大切さを再認識するとともに、「人を思いやる心」がしっかりと子どもたちの中に育っていることを実感しました。

「こころの言の葉」は親子の愛情が土壌となり幹となり、お互いが自ら生きる力で花を咲かせるための作品集であると思います。たくさんの方々に読んでいただき、親としての在り方を考える契機としていただきたいと思います。審査にあたり、今までの子育てについて振り返るひとときをいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

市PTA連合会会長

編集後記

関係の皆様のお御尽力により、「こころの言の葉」コンクール作品集第十二集が完成しました。過去最高の応募数は、各中学校での取組の成果と感謝申し上げます。特に、親の部の応募が三年連続で千点を超えました。このことは、所期の目的である「中学生とその親の心の交流」にとって、大きな意義があると思います。

今年の作品の傾向として、互いの存在をしっかりと認め合い、尊重し合う親子の姿がありました。また、昨年度象徴的だった辛い現実に向き合った親と子の心模様に加え、それを親子で乗り越えて前向きに動き出す姿勢も綴られています。このような、親子が行き違いを見せつつも心を響かせ合う様子を象徴して作品集のタイトル「ひびき合う心」は付けられました。

本年度の団体特別賞は、清水中学校が受賞しました。三年連続で保護者出品率が高いこと、さらに、入賞作品が多いことに加え、昨年度からPTA冊子「太鼓橋」を一新して「こころの言の葉」作品集として発刊していることなどの理由から今回の授賞となりました。この数年、学校独自で「言の葉」に取り組む学校が出てきています。このことは、まさに親子の心の交流を図る取組として、本事業が活用されたと言えるでしょう。

一方、課題としては、中学校全校における保護者作品の応募への掘り起こしに加えて、作品集をより多くの場所においてもらい、言の葉の認知度を高め、親子の思いについて、より多くの方々に考えてもらうきっかけとしてもらうことなどがあります。

来年度も、これまでの成果と課題を踏まえ、ますます親子の心の交流が図られるよう取り組んでいきたいと思っております。事業の趣旨を理解していただき、更に多くの応募をお待ちしております。

こころの言の葉

～第12集 ひびき合う心～

平成26年12月19日

発行 鹿児島市教育委員会
〒892-0816 鹿児島市山下町6-1
TEL (099)227-1941 FAX (099)227-1923

